

日本文化政策学会若手研究者交流セミナー2025 年度 発表申込

氏名： 大村 直子（おおむら なおこ）

所属機関： 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻先端芸術表現研究領域 博士後期課程

発表タイトル： 「創発的ケア・コモンズ」における「思いやりの循環」
—認知症共生社会に向けたインフォーマルな場の文化政策的意義—

発表要旨（1193 文字）

本研究は、急速な高齢化と認知症共生社会への希求を背景に、老いをめぐる「喪失」の経験を「新たな価値創造」のプロセスとして捉え直す根源的な問いを探求する。文化政策分野での認知症高齢者へのアプローチは、公的制度や専門的アート実践が中心であった。本研究は、それらとは異なるインフォーマルなケア実践の場、特に地域高齢者サロンの文化的潜在能力に着目した。

分析対象は、制度施行以前から 35 年間、個人の自宅で継続され、運営者の認知症家族も参加する地域サロン（昼サロン）である。比較対象として、同運営者による専門職向けケア・カフェ（夜カフェ）を取り上げた。混合研究法を用い、両実践の長期記録ノート（昼サロン 35 年分、夜カフェ 8 年分）の数量化・時系列分析、および参与観察とインタビューによる質的分析を行い、データを統合的に考察した。

分析の結果、ケアが実践されるインフォーマルな場を、相互作用から予期せぬ価値が生まれる動的な生成の場として捉える理論的枠組み「創発的ケア・コモンズ」を構築した。比較分析を通じ、この枠組み内に異なる価値生成メカニズムを持つ二類型、「実存的ケア・コモンズ」（昼サロン）と「機能的ケア・コモンズ」（夜カフェ）が存在することを明らかにした。

これらのコモンズを駆動する内的な力学として「思いやりの循環」を提示する。これは、参加者の一人のポジティブな行為—料理や手芸といった日常的な創造的実践 "little-c" (Kaufman & Beghetto, 2009) が、感謝の表明という肯定的な応答を得て次なる貢献意欲を誘発し、場全体に肯定的感情と互酬性が連鎖・循環するプロセスである。

理論的貢献は、「循環の質がコモンズの類型を決定づける」統合モデルを提示し、従来のコモンズ論、ケア論、表現実践論を架橋し、インフォーマルな場の多面的な価値生成プロセスを解明した点にある。「実存的ケア・コモンズ」の分析は、専門的介入に依らずとも、住民の "little-c" や「表現未満、」といった微細な文化的実践が、「存在の肯定」というケアリングな現実を生成し、「喪失」の価値観を転換させる可能性を示した。

実践的含意として、「思いやりの循環」を育む場のデザイン要素（関わりしろ、感謝の可視化、役割の多様性）を提示する。これは、文化政策の支援対象を、専門家プロジェクトから市民の自発的な文化的コモンズへと拡張する可能性を示唆する。本研究は、市井の人々の実践知と文化的営みの中に、共生社会構築の鍵が存在することを示す。

引用文献

Kaufman, J. C., & Beghetto, R. A. (2009). Beyond big and little: The four c model of creativity. *Review of General Psychology*, 13(1), 1-12.

若手研究者交流セミナー2025 年度、発表申し込み

1. 氏名：金 泰勲（キム・テフン）

2. 所属機関：大阪公立大学都市経営研究科 博士課程 1 年次

3. 発表タイトル

「日本と韓国におけるパブリックアートの変化とその影響に関する研究：
アーティストの集積を対象に」

4. 発表要旨

本発表は、二つの内容で構成される。第一に、博士論文の概要として、日本と韓国におけるパブリックアートの変遷とその影響に関する研究の目的と構成について示す。第二に、研究の基盤となるアメリカにおけるパブリックアートの変遷過程を整理し、時代的要因に基づく類型化を提示する。

1960 年代以降、欧米における都市再生の主流は「成長の極」戦略であり、開発理論に基づく経済効率性の向上と物理的環境整備が中心であった。しかし 1970 年代以降、フォーディズムからポスト・フォーディズムへの転換や脱工業化と知識社会への移行、さらにグローバル化の進展によって都市構造が大きく変化し、都市再生の方法も見直されることとなった。欧米都市では、従来の開発型アプローチのみでは問題解決が困難となり、1970 年代後半以降、文化・芸術の活用が新たな都市再生戦略として注目された。特に、パブリックアートは、1980 年代以降の欧米において都市再生の実践的手法として定着し、今日ではアーティストと地域コミュニティの協働を媒介する仕組みとして重要性を高めている。

日本と韓国においても、パブリックアートはアメリカのモデルから影響を受けつつ、目的や形式に相違が見られながら独自に展開してきた。しかし、両国における発展過程を体系的に整理し比較する研究は十分ではない。そこで本研究では、日本と韓国におけるパブリックアートの成立過程を明らかにし、アーティストの集積に着目しつつ、地域社会への影響を両国の事例分析を通じて実証的に検討することで、都市再生におけるパブリックアートの意義を明らかにする。

次に、研究の基盤となるアメリカにおけるパブリックアートの変遷を整理する。両国のパブリックアートの歴史的・政策的背景にはアメリカの発展モデルが影響しており、その変遷と類型化を整理することは、両国分析の理論的基盤となる。本研究は、この基礎部分を提示し、博士論文全体の重要な前提を示すものである。

1930 年代のニューディール政策以降、パブリックアートは都市美化運動や公共政策の一環として導入されたが、1970 年代以降は場所の文脈や人々との関係性を重視する方向へと展開し、政府主導からアーティスト、市民、非営利団体など多様な主体による協働モデルへと変化した。その結果、従来のモニュメント的・オブジェ的表現から、行為やプロセスを重視する柔軟性・可変性を持つアートとして広がりを見せている。

では、パブリックアートはいかなる過程を経て、パブリックアートの持つ意味が拡大され、

柔軟性と可変性を持つアートとして進展していったのか。そこで本研究では、アメリカにおけるパブリックアートの変化を生み出した時代的要因に着目し、1930年代から1990年代を対象にその変容過程を明らかにするとともに、時代的变化に基づくパブリックアートの類型化を試みる。